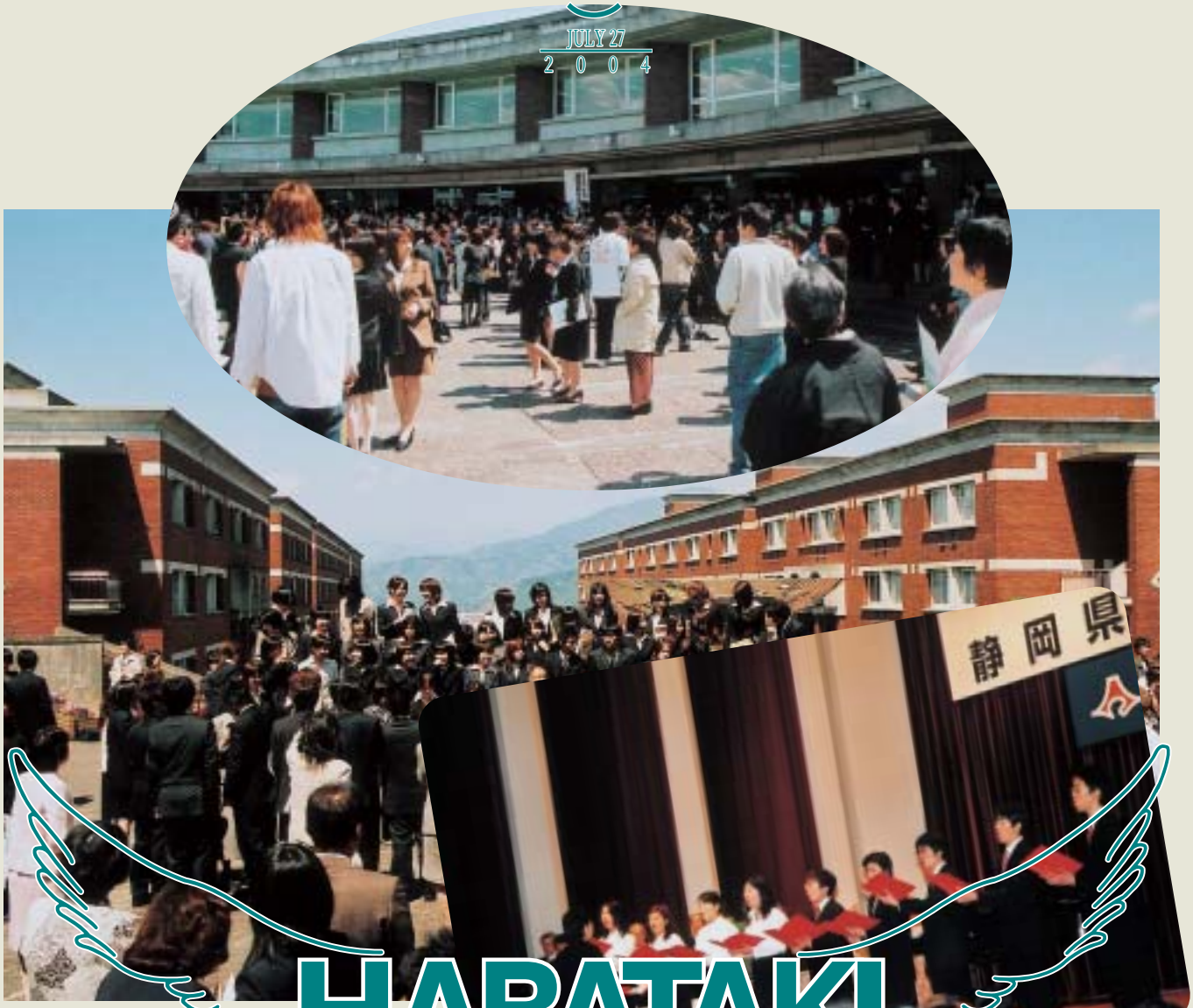
volume
90
JULY 27
2004



HABATAKI
はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA
52-1 Yada,Shizuoka-shi Shizuoka-ken 422-8526 Japan
inside NEWS

●CONTENTS●

入学式
　式辞（学部）…… 1
　誓いの言葉 …… 5
　式辞（大学院）…… 6
卒業式式辞ほか ……10
受賞 ……15
研究助成採択 ……16
外部資金受入状況 ……17
科学研究費補助金採択状況 ……17
産学官連携推進コーディネーター ……19
教員の人事 ……21
アリゾナ大学訪問 ……21
はばたき寄金からのお知らせ……22
学生の活動
　スプリングフェスティバル ……23
　多文化共生キャンプ ……23
開学記念行事 ……24
静薬発祥88周年記念……24
行事（実績・予定）……25
連携大学院 ……26
大学間協定 ……26
谷田風土記 ……27
国民年金の学生納付特例制度 ……27

平成１６年度静岡県立大学入学式式辞

静岡県立大学学長　廣部 雅昭

平成１６年４月９日、本学大講堂で静岡県立大学入学式が行われた。石川県知事、小野県議会副議長をはじめ、多数のご来賓出席のもと、５学部566名の新入生を前に廣部学長が式辞を述べた。

また入学生を代表して、看護学部の清水清乃さんが誓いのことばを述べた。

本日ここに、石川静岡県知事、小野静岡県議会副議長をはじめ、ご来賓の方々、また多数の保護者の方々のご列席を賜り、平成１６年度静岡県立大学入学式を、盛大に挙行出来ますことは、真に喜びに耐えないところであり、関係者一同深く感謝を申し上げる次第です。

まず始めに、これまでの努力が報われ、この度本学への入学を果たされた５学部、566名の新入生の皆さんに対し、大学を代表し、心からのお祝いと歓迎の意を表したいと思います。また、これまで長い間ご子弟を慈しみ、励まし、支えて来られ、今感慨を共に味わっておられるご家族の皆様方にも、心よりお祝いを申し上げたいと存じます。

さて、皆さんが将来の夢をかけ、数ある大学の中から、熟慮の末選択された本学の現状について、まず述べたいと思います。ご承知のように我が国の教育体制は、今大きく変わろうとしております。明治維新後の欧米の近代教育導入、第二次大戦後の学制改革につぐ、三番目の教育革命とも言われておりますが、それぞれに変革すべき時代背景が存在しております。

高等教育を担う大学に関して言えば、全ての国立大学が、この４月より、独立法人化され、自立的経営、個性的な教育・研究の実践など、競争原理の導入により、一層の自助努力を果たすべき方向性が示されたことなどは、予想を越えた大変革であります。本学のような公立大学にも同様の波がやって来ることは時間の問題であろうと思いますが、このような変革の流れが、将来の深刻な少子化や長引く経済不況に端を発していることはあるにしても、戦後５０年の教育・研究体制の中で培われた大学人の価値観や意識が、グローバル化時代への社会構造の急激な変化に適合できなくなった、言わば「制度疲労」に基づくものと理解すべきであろうと思います。しかし「教育は国家百年の計」といわれるように、「何をどう変えるべきか」「また変えてはならぬ普遍的なものは何か」等をよく検証・評価しつつ、将来に禍根を残さぬ、しかも時代の要請に適合した、有効適切な教育制度を、慎重かつ果断に構築しなければならないと考えます。

本学は昭和６２年に、将来予測される長寿社会、情報社会、国際社会など、社会構造の変化に適応できる有為な人材の育成を目指し、それぞれ伝統と実績を有した静岡薬科大学など県立三大学を統合し、さらに全国初の新学部を創設するなど「個性」を建学の精神に掲げてスタートいたしましたが、先見性のあるユニークな公立大学として、これまで社会から一定の高い評価を得て来たと考え

ております。現在、薬学部、食品栄養科学部、国際関係学部、経営情報学部、看護学部、環境科学研究所の５学部、１研究所、大学院５研究科、および医療・保健・介護・福祉に特化した短期大学部から構成されており、それぞれの設置理念そのものは、今日でも決して色褪せたものにはなっていないと考えております。大学の歴史としても創立１８年目で、未だ「新大学」の部類に属し、設置理念の実現に邁進すべき時期にあると言ってよいと思います。

一方で、世の中には「新幹線」のように、４０年経っても「新幹線」と称されて違和感がないものもありますが、それは時代のニーズを先取りし、さらにレールを延ばし、新技術の粋を導入し、常に新しさを追い求めているからであると思います。大学も同様で、常に「新大学」という意識をもって、社会の要請を敏感に捉えながら、それらに的確に対応して行く姿勢がなければ、すぐに陳腐化し、輝きを失うことになります。その意味では、本学も創立以来、様々な困難な状況の中にあっても、常に工夫を凝らしながら、可能な限り学内外のニーズに応える努力を果たして来たと言えます。その基本的コンセプトは「個性化」そして「高度化」へ。言い換えれば「オンリー１」そして「ナンバー１」へ・・と言ってよいと思います。最近数年間を例にとれば、特に大学院の充実という観点から、公立総合大学初の大学院看護学研究科の設置、さらに薬学研究科に「医療薬学専攻」、国際関係学研究科に「現代韓国朝鮮研究センター」を増設、また本年４月より薬学研究科に「創薬探索センター」、経営情報学研究科に「地域経営研究センター」を新設いたしました。さらに年度内にその具体化を目指しているものとして、国際関係学研究科博士課程の設置、全学的な「健康支援センター」「情報センター」「新領域創成総合センター」などがあります。いずれも本学の特性を生かし、研究・教育水準の高度化と、大学のもてる知的資産の社会還元を図る意図が含まれております。研究の個性化・高度化は、その推進者たる教員の資

質向上に資することであり、それは活力ある、瑞々しい教育となってフィードバックされるはずです。大学における教育と研究とは本来表裏一体のものであり、相互に啓発し合うことで光輝くものになると確信しております。とくに地域社会から、優れた人材と高度な研究成果の供給を期待されている公立大学において、研究機能と教育機能を分離することは不可能であると私は考えています。

このように皆さんを新たに迎える大学は、社会の変化に対応しつつ、質的充実を積極的に図っておりますが、それらを生かすも殺すも、大学の構成員たる教職員と学生諸君の意識変革が伴うかどうかに懸かっております。私が学長を拝命して今年で６年目、入学式で皆さんにメッセージを送るのはこれが最後になります。過去５度の入学式の中で述べた様々な事柄の中で、重要ないくつかの点をも含めて、これからの大学生活における心構えについて申し上げたいと思います。

先ず、第一に申し上げたいことは、しっかりと目的意識をもって学べということであります。自身が選択した専門分野で何を学び、社会に出た時、自分に何が出来るか、何をやりたいのかを明確に示せるように、在学中から常に心がけておく必要があります。今や大学を卒業しただけで、受け入れてくれるほど社会は甘くないと知るべきであります。自ら求めて学び、その結果得られた知識や技能は真に身についた実力であり、それを活用できる力が加わったものが「確たる学力」であると

私は考えています。その意味では現在の大学生の学力は極めて貧困であると言わざるを得ません。ハングリー精神をもって貪欲に学び、真の学力を身につけて頂きたいと強く希望いたします。

第二は、幅広い教養を身につけよということであります。この教養と言う言葉の定義は曖昧で、十人十色でありながら、現代人に教養が不足しているという点では一致しています。これは何故でしょうか。確かに専門が細分化され、自身の専門分野以外の知識、常識といってもよいと思いますが、それらが乏しいこともありましょう。学生時代に、専門分野以外の知識も出来るだけ吸収し、視野を広めることが大切であることは言うまでもありませんが、深い思索を伴うことが必要であります。多くの人々に接し、様々な考え方があることを理解した上で、自身のしっかりとした主張を持ち、自身の言葉で、説得力をもって相手に伝える能力を身につけて頂きたいと思います。また歴史観に立脚した洞察力を養うことが大切です。今世界中で起こっている多くの事柄が、良きにつけ悪しきにつけ、過去の繰り返しに思えてならないからであります。“歴史に学べ”という格言を改めて想起し、先人の遺した歴史的著作等を丹念に読むことを推奨いたします。卒業後、社会が皆さんに求めている具体的な“教養”として、語学力とＩＴ技術があることも知っておく必要がありますが、本来、教養とは様々な教育過程、社会体験等を通じて、自然に身につく全人格的素養であり、生涯を通して涵養されるべきものであります。しかし多くのことを学ぶことが出来、感受性の高い学生時代こそ、豊かな教養を身につけ得る絶好の時期であると思うからであります。

第三は、創造力を養い、絶えず磨けということであります。創造力とは未知なるものを生み出す力であり、独創的発想から生まれるものでありますが、そこには新規性と有用性、さらに意外性が加わることも重要です。独創性は研究の根幹をなすものですが、様々な知識を融合する思索過程から生まれることが多く、豊かな知識と知的好奇心、余念なき思索で得た閃きを実行に移すチャレンジ精神が必要であります。私は学際領域こそ、発明、発見の宝庫であり、創造力はそれを解き開く鍵であると信じています。そして独創的発想とその実現によって生まれるものが「個性」であると考えていますが、個性を光輝くものにするには、絶えず磨く努力が必要であります。皆さんがこれから大学で学ぶ様々な知識や技能は、創造力発揮のための貴重なツールになりますが、使わなければ、直ぐに埃まみれになってしまいます。大学など組織も同様で、持続的な努力を怠れば輝きは直ぐに失せてしまいます。我々の心すべき点であります。

第四は、豊かな人間的感性を磨けということであります。私が大学を卒業するとき、時の学部長は、ガン末期の苦痛に耐えながら、最後の訓示で「報酬を求めず働け」と言い残し、数日後この世を去りました。私は今でもこの言葉を、尊敬と感動の念をもって心に刻んでいます。自己を犠牲にしても他に尽くすという感覚は、自己中心的な風潮の強い現代においては、確かに殆ど影をひそめてしまったように見えます。しかし本当にそうなのでしょうか。自分の子供を虐待したり、餓死させたりする例外的な異常人間を除けば、ほとんどの人は、家族のためなら、身を挺しても危害から守るでしょう。それは動物ですら備わった本能的な感性だからです。現在文部科学省では「教育基本法」の見直しを検討し、その中で「愛国心」の涵養を謳おうとしておりますが、私は今更、かつてのような「滅私奉公」とか「殉国の精神」を国民すべてに求めているのではなく、例えば、オリンピックで日の丸が揚がり、国歌が吹奏されれば、素直に感動する。静岡県が、あるいは県立大学の評価が上がれば、自分のことのように喜ぶ。そのような人間に本来備わった公共的な感性を喚起する意図と受けとめております。最近外国では日本古来の「武士道」が見直されております。これは

１９世紀末、「われ太平洋の掛け橋とならん」と言って、我が国の国際化に貢献された新渡戸稲造博士が、英語で日本の精神文化を外国に紹介した著作に端を発するものですが、我慢、勇気、信念、潔さ、名誉を守る、恥を知る、嘘をつかない、約束を守る、人を貶めない、弁解をしない、家族を大切にする、人を思いやるなど、誰もが人として大切な感性と認める、これら全ては「武士道」の規範になっているものばかりであります。戦後日本人が口にすることを憚って来た、この「武士道」が今何故世界でもてはやされているのか大変興味がありますが、混迷した現在の国際情勢などを考えれば、うべなるかなと感ずるものがあります。私ども日本人も、世界に通用する自国の精神文化に誇りを持ち、このような人間としての感性を、精神的なバックボーンとして大切にしたいものであります。今私どもは国際貢献や地域貢献の重要性をしばしば口にいたしますが、これらも「武士道」に通ずるものであることを再認識すべきであろうと思います。

最後として、国際的感覚を身につけよということを申し上げたいと思います。本学は建学以来、世界各国の大学や研究所と国際交流協定を結び、教員、学生の相互交流を積極的に推進する一方、多くの留学生諸君を正規に受け入れております。本年も学部、大学院合わせて５ヶ国、２０名の皆さんが入学されました。現在本学に学ぶ留学生は新入生を含め、１０ヶ国、９０名となっております。また日本人の学生の中でも、在学中に外国に留学する人も年々増加しております。いうまでもなく留学の真の目的は留学先での教育、研究、生活、地域交流などを通じ、その国の言語、文化、学問・技術などを身をもって理解し、体得することにより、国際感覚を磨き、将来自国への貢献のみならず国際交流の面で大きな貢献を果たすことが期待されているものであります。留学体験はその人の人生の中で、ほろ苦くも楽しく有意義な記憶として残るものであります。習ったはずの言葉

がほとんど通じない戸惑い。生活習慣に慣れるまでに、しでかした数々の失敗。それらを許容し、様々な援助を惜しまなかった他国の人々の温情。数十年経った後までも変わらず続く友情。これら心の交流が何よりも大切なことであります。一方で他国文化を理解し、学ぶことは、決してそれらに迎合することを意味しません。自国文化に誇りを持ち、正しく理解してもらう努力も大切なことです。それぞれの国の文化を尊重し、認め合う姿勢がグローバリズムの原点であると思うからです。日本人の皆さんも、留学生の皆さんと大いにスキンシップをはかり、様々な支援活動等を通じて、お互いに国際感覚を磨いて頂きたいと希望いたします。

以上新入生の皆さんに対し、いくつかの重要と思われる心構えについて申し上げましたが、今後大学がどのように変わろうとも、教育、研究を通じて有為な人材を育成すること、優れた知的資産の創出と社会還元により社会の発展に貢献することが大学の使命であることに変わりがないと同様、学生諸君の心がけるべき普遍的な事柄であると信ずるからであります。

これからの４年間は瞬く間に過ぎてしまうでしょう。努力の多寡が皆さんの将来を大きく左右することになると思います。「少年老いやすく、学成りがたし。一寸の光陰軽んずべからず」という先人の言葉をおくり、皆さんへの激励と歓迎の言葉といたします。

平成１６年４月９日

誓いのことば

入学生代表　看護学部１年　清水 清乃

　あたたかな春の息吹が感じられる今日の日に、私たちは憧れの静岡県立大学に入学することができました。本日は、私たち新入生のため、このような盛大な式を執り行っていただき、誠にありがとうございます。

　また、ただ今は、廣部学長先生、石川県知事、小野県議会副議長から温かく、心強い激励とお祝いのお言葉をいただき、新入生一同大変感激しております。心からお礼申し上げますとともに、この気持ちの高揚をいつまでも忘れず、理想を高く掲げ勉学に励み、夢をはぐくんでまいりたいと存じます。

　さて、現代社会は、２０世紀の飛躍的な科学技術の発達により、「物質的」にとても豊かになり、私たちの日常生活は、便利で快適になりました。
しかし、広い視野で世界を見てみると、「物質的」な豊かさの一方で、環境破壊や食料不足、地域紛争など、深刻な問題が生じています。
「物質的」な豊かさを優先する価値観や考え方は今、見直しが必要な時期になっているのではないでしょうか。私は、２１世紀とは「心の」豊さを追求する時代であると思います。

　私の好きな言葉の一つに、「冷静と情熱のあいだ」という言葉があります。これはある作家の小説のタイトルなのですが、この言葉はまさしく困難な問題に立ち向かう上でも、日常生活を送っていく上でも、大切な２つの面を表していると思います。
これからの私達には、自分の内面を見せたり他人を思いやったりする心、すなわち情熱を根底にもって、冷静で的確な判断や行動をすることが必要なのです。

　私が入学しました看護学部の理念では、人々の健康生活の向上に寄与できる人材となるためには、まず人間尊重の理念に基づくことが必要であるとされています。
人間尊重の理念に基づくとは、まさに豊かな心を持つことだと思います。
近年、医療現場では、遺伝子解析に伴う倫理問題や患者の人権問題など、非常に難しい問題が起きています。

これらの問題に簡単な解決方法はありません。
しかし、現場で携わる一人一人が、豊かな心を持ち、冷静にこれらの問題に向き合えば、きっと解決の糸口は見出せるはずです。

　私はこのような想いを抱いて、静岡県立大学看護学部を志望しました。

　本日、入学を許可されました566名は、薬学、食品栄養科学、国際関係学、国際言語文化学、経営情報学、看護学と志す分野はそれぞれ異なりますが、これからの２１世紀の担い手となるため、切磋琢磨し、日々努力してまいります。

　今日は大学生活の記念すべき第一歩です。
これまでとは少し異なった環境で生活するわけですから、もちろん心配なこともあります。しかし、大学生であることを自覚し、広い視野で物事を考えられるよう、様々なことに挑戦していきたいと思います。自分自身の「感受性」を大切にしながら、不安を徐々に自分の可能性への期待へと変えていきたいと思います。

　廣部学長先生を始め、諸先生方、諸先輩方には、厳しくも温かい御指導をいただきますようお願いいたしますとともに、今日の決意を常に忘れず、日々精進して参りますことをここに誓いまして、誓いの言葉とさせていただきます。

平成１６年４月９日

平成16年度静岡県立大学大学院入学式式辞

静岡県立大学学長　廣部 雅昭

本日ここに平成１６年度、静岡県立大学・大学院入学式を挙行するにあたり、現在激しく変わる我が国の大学あるいは大学院を取り巻く諸状況と、そのような流れの中で、本学が現在どのような取り組みを行っているか等について述べ、これから大学院生活に入る皆さんに対し、幾ばくかの心構えなど希望を述べたいと思います。

まず始めに、本年度大学院への入学を許可された５研究科総計173名（外国人留学生１０名を含む）の皆さんに対し、大学を代表して心からのお祝いと歓迎の意を表したいと思います。

皆さんは大学の学部教育あるいは大学院修士課程での研鑽を経て、高度職能人あるいは研究者への道を歩むべく、より高度な専門的知識や技術の修得を目指し、大学院に進まれたことと思います。しかし皆さんを迎える大学も大学院も、今や大きく変貌しようとしております。この４月から全ての国立大学が独立法人化されたことは皆さんもご承知のことと思いますが、それぞれの大学が存亡をかけ、自立的経営、個性的な研究・教育の実施など、競争原理の導入による一層の自助努力が求められる時代になりました。これまであらゆる面で国立大学準拠路線をとってきた公立大学が、同様の道を歩むことになるのは時間の問題であろうと思いますが、本学は、すでにその事態を予測し、公立大学のあるべき将来像を模索しつつ自律的な変革を心がけて来たと考えております。戦後５０年以上続いた画一的な教育制度が、熾烈な国際競争の時代の中で「制度疲労」を起こした結果であると思いますが、研究教育を通じて有為な人材を育成すること、優れた知的資産の創出と社会還元

によって社会の発展に寄与するという大学本来の普遍的使命に変わりはなく、むしろそれらを阻んで来た諸要因を除き、新時代に相応しい自由闊達な大学の発展を保障し、助長するための制度設計でなければならないと考えています。法人化によって、現在それぞれの国立大学が様々なアイデアを競って打ち出しておりますが、瀬戸際に立った時に発揮する大学人の力をあらためて感じ入ると同時に、創造力こそ、熾烈な競争社会の中で勝ち残る要諦であり、研究者の最も得意とする所ではないかと確信を深めた次第です。

本学も最近数年間、財政的に困難な中でも、様々に工夫を凝らしながら、学内外のニーズに応える努力を果たして来たと考えていますが、特に大学院の充実という点で言えば、公立総合大学初の大学院看護学研究科の設置、薬学研究科に「医療薬学専攻」、国際関係学研究科に「現代韓国朝鮮研究センター」の増設、また本年４月より薬学研究科に「創薬探索センター」経営情報学研究科に「地域経営研究センター」が設置されました。また今年度内にその具体化を目指しているものとしては、国際関係学研究科博士課程の設置、部局横断的組織としての「新領域創成総合センター」など

があります。いずれも本学大学院の研究教育の個性化と高度化、さらに地域への貢献を意識したものであります。これからの大学は国公私立を問わず、開かれた大学として、社会貢献が強く求められる時代になりますが、とくに公立大学の存立基盤である地域に対する貢献は極めて重要であり、本学も産学連携、社会人教育などを積極的に推進する体制を整え、活動を開始しております。

一方、地域貢献の別の形として、地域の大学、研究機関との間に「連携大学院」を構築し、相互に院生の受け入れ、派遣等を行い、研究教育の幅を広げることで、質的充実を積極的に図ることといたしました。現在本学は、従来の静岡大学に加えて、浜松医科大学、県立総合病院、静岡ガンセンター、静岡工業技術センターなど県内の試験研究機関、さらに県内大手企業の研究所との間にも連携大学院協定を締結し、産学連携の実を上げることも企図いたしました。学問・研究の著しい進展の中で、教員や施設の増強を図ることが殆ど不可能な状況において、この方式は相互にメリットのある有効な方法として今後一般化するものと考えています。このように本学の大学院は、時代の変化に対応して、様々な試みを実施しており、その成果には期して待つものがあります。院生の皆さんも、これらの動きを良く理解し、積極的に活用するよう心がけて頂きたいと思います。

さて次に、大学院に入学された皆さんに対して、これからの研究生活における心構えについて若干の希望を述べたいと思います。先ず大学院の修士課程では、専攻分野の専門的知識を深く学ぶことになりますが、質・量ともに等比級数的に増大する様々な事柄の中から、何を選んで学ぶかの判断は大変難しく、いきおい専門が狭く限定され勝ちになります。しかし可能な限り、関連する境界領域の事柄も広く学び、相互に関連づけが出来るようにする習慣が大切です。それが将来独創的な発想に結びつくからです。また起・承・転・結が明確に示された、優れた研究論文を丹念に読むことが大切です。それは研究の進め方、論理的思考のトレーニングになるからです。本来修士課程では、もっと教育に重点が置かれるべきであると考えていますが、我が国では研究推進の重要な担い手として期待されており、与えられた研究テーマのもとで、博士課程の学生と同様、研究に没頭するのが一般的になっています。しかしこの時期、豊かな発想を可能にするため、視野を広め、知的好奇心、探究心を育む訓練を是非行なって欲しいと思います。博士課程においては、独立した研究者の卵として、自ら新しい分野を開拓するチャレンジ精神が必要です。

かつて私は学生から研究レポートを提出させる際に、得られた成果の中で、どの部分が新規なのかを、その理由とともに必ず書かせるようにしました。それを書くために学生は必死に考えながら研究を進めざるを得なかったと思います。研究者は、例えば科学研究費を申請する際、申請書には研究の目的、意義、実施計画、予想される新規な成果とその波及効果、当該研究の国内外での位置付け、などを必ず書かされます。研究を計画し、進める際には、これらの項目を常に意識しながら行うことが必要です。私が科学研究費等の申請を奨励する趣旨もそこにあり、またそのことによって、自身の研究の進め方や問題点が見えて来ることと、研究の内容をアピールする技術が身につくからであります。

これからは常に評価が伴う時代になりますが、評価者は決して対象となる研究のプロばかりとは限りません。研究の趣旨が専門外の人間にも理解できるようなアピールの仕方を学ぶことも重要で

す。４年前より学長特別研究費などの成果報告を全学公開で行うようにしたＵＳフォーラムで、他分野の審査員も含めた評価方式を採っているのはそのためであります。かつてこの入学式でも紹介したことがありますが、毎年春に開催される日本薬学会年会において、全国国公私立薬系大学、諸研究機関、企業研究所から発表される三千数百題の研究の中から、学会が選定するハイライト研究５％の中に含まれる、本学薬学研究科からの研究発表数は常に最上位を占め、過去５年の中、１位が２回、５年平均では阪大、東大に次ぎ第３位となっています。これは研究の質の高さとともに、テーマの社会へのアピール度が優れていることを示していると言えます。私が関係している分野故、毎年フォロー出来ている訳ですが、他の研究科においても、それぞれの分野で、高い全国的評価が得られているものと確信しています。

大学における研究は、かつては真理の探究という大義のもとで、深淵なる高度な基礎研究のみに目が向けられ、狭い同一専門分野の研究者に理解・評価されることで事足りるとする風潮がありました。しかし今日、これら蓄積された基礎研究の成果を社会に役立つよう還元することが強く求められるようになりました。それなくして法人化後の大学の存立基盤はないと言っても過言ではありません。これを大学における基礎研究不要論と結びつけるとすれば大変な誤りであり、社会に役立つ研究すなわち応用研究は基礎研究なくして成り立つものではありません。これまで自前で基礎研究を行って来た企業等も、そのゆとりをなくし、産学連携の強化などを通じ、大学等の基礎研究を活用することに目を向けて来た事情もありますが、科学技術立国を国是に掲げた我が国において、大学の知的資産の活用をはかることは蓋し当然の事といえます。

基礎研究と応用研究の関係について、かつて私はこの入学式の式辞の中で述べたことがあります。「両者はハンマー投げの求心力と遠心力に相当し、互いに異なったベクトルを有するが、同じ力で互いに引き合っている。ハンマーを遠くに飛ばすためには求心力を高めなければならない。優れた基礎研究は優れた応用研究を生み、応用研究の進展は必ず新しい基礎研究を必要とするもので、相互に啓発することで画期的な成果がもたらされる・・」という意味のことを申しました。今日さらに付け加えるならば、この二つの力を結ぶ鎖を太く強固なものにする必要があるということであります。応用研究と基礎研究の連携を深めるという意味もありますが、私は科学者のモラルの問題を含めたいと思います。応用研究は限りなく遠心的で、それがもたらす利便性のみに目が奪われがちですが、それに伴って生じうる、例えば環境破壊、医療過誤、人権問題など、未知なる負の部分に対する考察を怠ってはならないということであり、それらを予測できるのは研究者自身であると思うからです。私はハンマー投げの競技が、他の競技と並行しながら同じグラウンドで行われているのを何時も心配しながら観戦していますが、若し鎖が切れれば、どの方向にハンマーが飛んで行くか予測が立ちません。一応防御ネットはありますが、大変な惨事になるだろうと思います。今後は人命と直接かかわる先端的研究も増加して来るでしょう。ハンマーを操る科学者は「研究倫理問題」についての意識を強く持つ必要があるということを強調したいと思います。

研究には独創性が不可欠であります。発想に新規性があり、得られる結果に新たな有用性等が加われば、一般的には高い評価が得られると言って良いと思います。しかし研究者層の厚い同一の専

門分野で、何が新規で、独創的なのかを見極めるのはそうたやすいことではありません。自分の考えていることは、往々にして他の研究者も同じように考えている場合が多いからで、それは研究者が学会活動や研究論文誌などから知る世界の研究トレンドに無意識に影響されているからであります。一般的には国際的な論文誌に研究成果を投稿し、レフェリーの評価に委ねることになりますが、プライオリティを巡って熾烈な争いになります。それよりも（これも機会を捉えては申し上げていることですが)、新領域の創成をはかり、無人の原野を切り拓く快感を味わうことも研究者冥利に尽きるということを知るべきです。それには自身の研究分野と他の分野との結合をはかる発想が大切です。境界領域は独創的発想の宝庫であり、いわゆる「オンリー１」領域は研究者個人の頭の中では無数に描き得るものですが、言うまでもなく構想した新領域は、その意義が明確に示され、学界等からも評価されなければなりません。当初は適正に評価できる専門家が存在しないこともあって、認知させるための粘り強い持続的な努力が必要になります。

一昨年度、文部科学省が、個性的で将来性のある研究計画を推進するために設けた「２１世紀ＣＯＥプログラム」に、本学から「健康長寿・薬食同源」をキーワードに薬学研究科と生活健康科学研究科の研究を融合した研究拠点計画を申請し、学際・複合・新領域部門で採択されましたが、異分野融合による新領域創成の画期的実例といえます。本年度は中間評価が実施されますが、世界最高水準の研究拠点を形成することが求められており、これからが真価を問われることになります。なお、このＣＯＥ予算の中には、大学院生を含む若手研究者の国際会議派遣や、ティーチングアシスタント、ポスドク採用など、大学院教育の充実に対する配慮がなされており、すでに多くの院生がその恩恵に浴しております。これらの制度は院生など若手研究者に対する国家的期待の大きさを示していると考えられますが、皆さんも本ＣＯＥプロジェクトの趣旨を理解し、大いに研鑽努力して下さるよう希望します。

研究に国境はなく、競争も連携もグローバル化の時代に入り、今やあらゆる情報も瞬時に世界に発信されるようになりました。このような国際化の時代に、われわれ日本人はどのように対処すべきか、極めて重要な課題でありますが、この後、第２部の記念講演会において、静岡県国際交流協会会長で本学の参与でもある、（株）鈴与の鈴木與平社長に「世界の中の日本人」と題してご講演を頂くことになっておりますので、期待をもって拝聴したいと思います。

私が学長として入学式でメッセージを送るのはこれが最後になります。過去５度の大学院入学式の中でも様々な事柄について述べてまいりましたが、今後大学や、それを取り巻く社会環境がどのように変化しようとも、降りかかる難問を解決しうる力は、当事者の創造力であると私は確信しています。若い皆さんは、新しい時代を担う知的活動の推進者であるという自覚をもって、常に創造力を養い、それを研ぎ澄ますよう、日々研鑽に努めて頂きたいと、熱烈なエールをおくり、私の歓迎の辞といたします。

平成１６年４月９日

平成15年度静岡県立大学卒業式式辞

静岡県立大学学長　廣部 雅昭

平成１５年度静岡県立大学学部卒業式、大学院学位記授与式が３月２２日、本学の大講堂で行われた。石川嘉延静岡県知事をはじめ、多数のご来賓、ならびに保護者の出席のもと、廣部学長が式辞を述べた。

本日ここに石川静岡県知事、水口静岡県議会議長はじめ、ご来賓各位、また多数の保護者の方々のご参列を頂き、静岡県立大学平成１５年度、学部卒業式、ならびに大学院学位記授与式を盛大に挙行出来ますことは、真に喜ばしいことであり、関係者一同深く感謝を申し上げる次第です。

まず始めに、４年間の学業の成果が認められ、本日卒業を迎えられた５学部504名、また、大学院での、さらに高度な教育・研究を経て、学位を取得された修士課程137名、博士課程１６名、総計657名の皆さんの、これまでの研鑽・努力に対し、大学を代表して、心からの敬意とお祝いを申し上げたいと思います。またこの日を待ち望み、今喜びを共にしておられるご家族の皆様方の、これまでの暖かいご理解、ご支援に対しましても深く感謝を申し上げたいと存じます。

さて皆さんは今日の卒業式に臨み、今様々な感慨が脳裏をよぎっておられると思います。私はこれまで入学式において、新入生に対し、常に目的意識をもって学び、自身の個性を見出し、それを磨き、卒業時においては、社会に出て何が出来るのか、何をしたいのかを明確に示せるよう、在学中から心がけるようにと申して来ました。今瞬く間に過ぎた大学生活を振り返り、皆さん自身、どのような自己評価が出来ているのでしょうか。充足感に満たされ、自信をもって明日からの活動に胸膨らませている人から、幾ばくかの不安感を抱きながら、取り敢えず社会に出てからと考えている人まで、様々であろうと思います。しかし、皆さんを待っている社会は、長引く経済不況や、熾烈な国際競争に曝される中で、現在厳しく変貌していることに気づかねばなりません。

最近の報道によれば、現在、完全失業率は６％にも及び、いわゆるフリーターと言われる層が417万人、そのうち大卒、高卒で就職を希望しない人達が３０％、就職しても長続きせず、職を離れてしまう人達を含めた、３０代のフリーターが、実に８０万人にも達しているとのことです。何故若者がフリーターになるのか、理由は「なぜ仕事をしなければならないのかが分からない」「何がやりたいのか自分で分からない」「やりたい仕事での求人がない」といった例が多いそうであります。このような人達は、短期間のアルバイト的な仕事を転々としている訳ですが、さすがに３０代位になると「自分のアイデンティティがない」「年金保険

料が支払えない」といった不安感から、安定した仕事を求めるようになるようです。しかし企業ではアルバイトを実績としては評価せず、正規の就職口は、益々狭くなる一方とのことであります。

一方で、最近は様相が変わり、企業はフリーターを短期間の安価な労働力として見直し始めたようであります。国際競争力を高めるための、コスト重視の企業論理であると思いますが、聊か近視眼的発想ではないかと危惧しております。推計によれば、2050年には、企業における正社員とフリーターの比率が同じ位になるだろうと言われています。しかし、経済力に乏しく、生活に不安を抱える若手中堅層を輩出することで、真に豊かで、活力ある、安定した社会を生み出すことが出来るのでしょうか。

私が皆さんに申し上げたいことは、これまで異端視されていたフリーターが、市民権を得つつあるという錯覚から、それに甘んずることがあってはならないということであります。幸い本学は就職率も高く、最終的には９５％以上、学部によっては100％に達するであろうと予測しており、いわゆるフリーターは極めて少ないと考えておりますが、就職後フリーターに転ずる人達がどの位存在するのかは、基本的には自己責任の範囲であり、把握されていないのが実情であります。

私は、この時期、毎年のように卒業生に対するメッセージを、この「式辞」とは別に、「色紙」の形で書かされておりますが、今年も二つの学部から求められ、「堅忍不抜」と「小因大果」という二つの言葉を提示いたしました。本日はこの意味を解説しながら、関連する事柄を述べたいと思います。「堅忍不抜」とは“我慢強くこらえて、軽々に心を動かさない”という意味であり、「小因大果」とは、“小さな原因が、予想もしない大きな結果を

もたらす”という意味であります。

今一度フリーターの話に戻りますが、大学卒業後３年以内の離職率が極めて高いことが、若年層のフリーターを多くしている大きな要因と言われております。「仕事に生き甲斐を見出せない」「社会の厳しさに耐えられない」といったことが、主たる原因のように感じますが、“石の上にも三年”といわれるように、我慢強く耐えることで、「仕事の面白さ」や「やり甲斐」も生まれてくるのであって、“隣の芝生はきれいに見える”的錯覚から、転々と仕事を変えることで、真に満足し得るものに巡り合う確率は、決して高くないと知るべきであります。一方で、フリーターを重宝な戦力と見なす企業論理からは、正規の社員といえども、企業に貢献しない者は、切り捨てられる可能性が常にあり、「組織の発展のため」という意識をもって、日々努力しなければならないということを、肝に銘じておく必要があります。

さて、この「堅忍不抜」ということは、研究の面でも言えることであります。皆さんの中で、引き続き大学院に進学し、高度な研究に従事する人達にも申し上げたいことであります。研究は独創性が最も貴ばれますが、「未知なるもの」への挑戦ですから、当然結果は簡単には出ません。評価を

焦るあまり、結果が予測できるような、浅薄なテーマだけを漁るようでは、真にインパクトのある、独創的な研究成果は得られないということを知るべきであります。正しいと確信した研究は、迷わず、果敢に、粘り強く実行することです。努力すれば、必ず結果はついて来るものです。当然評価というものは、結果のみでなく、努力の過程を含めて行われるべきことは言うまでもありません。

冒頭から厳しいことを申し上げましたが、今日卒業される皆さんの大部分は、これまでの４年間を、悔いなく、有意義に送り、自分自身の確かな成長を実感しておられると信じております。中でも先ほど“はばたき賞”を受賞された方々の中で、とくに４年前の入学式の際に、私から皆さんに紹介した、国際関係学部の大胡田裕君が、全盲という大きなハンデを抱えながら、極めて優秀な成績で、卒業を果たされたことは特筆に価します。在学中は柔道部、軽音楽部でも活躍し、イギリスへの語学留学も果たし、卒業後は大学院に進学し、将来は教師の道を目指すとのことであります。ここに至るまでに、おそらく人の何倍もの努力によって困難を克服されたことは、想像に難くなく、昨年の看護学部の長倉さん同様、周囲の人々に多くの感動と教訓をもたらしたことと思います。先日私は同君に直接インタビューを試みましたが、その際同君は、自分を支えてくれた多くの人々に対する感謝の念とともに、“これまで色々な苦労はあったが、いじけることなく頑張れたことが良かった”と述べておりました。“順境にあって謙虚であることは、それほど難しいことではないが、逆境にあって卑屈にならないことは甚だ難しい”と私自身も常々感じておりましたので、同君の真摯で、誠実な人柄に感銘をうけました。まさに「堅忍不抜」を地で行くような同君が、今後も様々な困難に耐えて、初志を貫き通し、優れた教師になって下さる事を心から願っております。

次に「小因大果」ということについて申し上げたいと思います。昨年の３月２０日、まさに卒業式を行っている最中に「イラク戦争」が勃発いたしました。私は式辞の中で、「平和のための戦争か」「戦争のための戦争か」それは歴史が評価することになろうが、起こり得る諸々の結果については、世界中の人々が、後世に共同の責任を負う自覚が必要であるということを申しました。その後の経過は周知の通りでありますが、一年経った現在、世界は不気味な様相を呈し、先行きは全く予測が立ちません。少なくとも良い方向に向かっているとは言い難い状況であると言えます。「ボタンの掛け違い」にならなければと願っておりますが、過去の戦争の歴史を見ても、その発端は些細であっても、早期に収拾を図らなかったことが、長期にわたる泥沼化と、想像を絶する悲惨な結果を招いている例が殆どと言ってよいと思います。日常的な事柄の中でも、傷口を大きくする前に適切な対応を図らなかったばかりに、収拾のつかない大きな問題に発展してしまったという例は、枚挙に暇ありません。「千丈の堤も蟻穴より崩る」「過ちては、改むるに憚ることなかれ」などの格言は、このような人間の陥りやすい習性に対する警句であ

り、私どもが常に心すべき点であります。

もとより人間の行うことに完璧ということはなく、ミスはつきものではありますが、世の中には、許されるミスと、許されないミスとがあります。それは結果のもたらす質的、量的な影響の大きさによって定まるものと思います。人生はある意味で、失敗の連続といってもよいと思いますが、一般的には、その結果は、自分自身が被るものであって、自己責任として他から責められることはないでしょう。しかしミスの結果が自分以外の人々、あるいは社会に及ぶ場合は、失敗では済まされない重さがあります。その典型的な例の中には、いわゆる入試ミスや医療ミスなどがあります。卒業生の皆さんの中には、卒業後、人命にかかわる医療や食品の分野で、仕事に従事する人が多い筈ですが、この分野の仕事は、常にそのようなリスクを抱えた、リスクマネージメントであり、皆さんはそのリスクマネージャーであるという強い意識を持つ必要があります。慣れによる油断を戒め、常に基本に忠実に、細心の注意を払うことが肝要であります。

一方で、原因が明確でなく、対処の仕方も、注意の仕様もない事態もあります。この１～２年、世界はサーズ、ＢＳＥ、鳥インフルエンザなど、動物が関与する、新型感染症の出現に翻弄されております。未だ有効適切な処方が見出せないままに、強引とも思える対症療法的措置がなされておりますが、感染源がもし人間ならどうするのだろうかと慄然たる気持ちになります。「科学の未熟さ」と「危機管理の脆弱さ」を思い知らされている憾がありますが、環境破壊などによる、生態系の変化に起因するのではないか、自然災害も含めて、人類の驕り、無知に対する警鐘として、自然がもたらした「無差別テロ」の前兆ではないかとさえ、感ずることがあります。今後も出現する可能性のある、これら人類の滅亡にも繋がりかねない、不気味な未知の事態を、未然に阻止する有効な手立てを、国際協調体制の中で、早急に構築する必要があります。「人間同士の空しい争い」など続けている場合ではない・・という危機意識を世界中の人々が持つべきではないでしょうか。

以上、これから厳しい社会に巣立つ皆さんに対し、「堅忍不抜」「小因大果」という二つの言葉を、「はなむけ」として申し上げましたが、先行き不透明な「カオス」の状態にある現実社会の中で、無関心をきめこみ、流れに身をまかせているうちに、事態は思いもかけない、取り返しのつかぬ方向に展開しかねない危険性を孕んでいるように思えてなりません。どうか皆さんは、現実を直視し、粘り強く、しっかりと足元を見つめながら、自らの人生を切り開いて頂きたい。そして、確たる歴史観に立脚した洞察力を働かせながら、広く世界に目を転じ、当事者意識を強く持って、安定した「地球社会」実現のために、英知を養い、若いバイタリティを存分に発揮して下さることを、心から期待し、卒業される皆さんへのメッセージといたします。

皆さんご卒業おめでとう。

平成１６年3月２２日

卒業式トピックス

《県立大学を全盲の学生が卒業》

（左から２人目が大胡田さん）

（要旨）

全盲という視覚障害を持ちながら勉学に励み、優秀な成績を収めた、国際関係学部の大胡田裕さんが卒業しました。

（在学中の活動など）

・教職課程（英語）の履修、柔道、軽音楽クラブへの参加、など積極的に活動。

・高等学校教諭一種免許状（英語）を取得。

・「はばたき賞」の受賞（本学で、特に成績が優秀で、かつ努力が認められた者を表彰）

（今後の抱負）

本年４月からは本学大学院国際関係学研究科修士課程において、学部で学んだ分野をさらに深化して研究していきたいと考えており、また、高等学校の英語教師になるという希望を達成するため、さらなる努力をしていきます。

《県立大学大学院で６３歳の修了生》

（要旨）

県立病院を退職後、静岡県立大学大学院看護学研究科に進学し、同大医務室に勤務しながら研究を続けた内藤晴美さんが、３月２２日に同研究科を修了しました。

（内藤さんの研究テーマなど）

「ターミナルケアにおける看護技術に関する研究」と題し、延命より生命の質の重視へ人々の意識が変化した今日、死を見取るターミナルケアにおいて看護者が提供する専門的なケア技術を明らかにすることにより、安らかな死に向けての援助を可能にすることに主眼を置いた研究を佐藤登美研究科長の指導のもとで行いました。

（今後の抱負）

研究を通して学んだことや明らかになったターミナルケアの技術の概念を具現化していくための取り組みをしたい。臨床現場において、日々、看護実践に携わる看護師たちが、人間的成長をしつつかけがえのない人への支援をしていけるよう、身近なところから貢献していきたい。

受 賞

Award「International Scientist of the Year 2004」を受賞

（受賞者）
　山口正義（大学院生活健康科学研究科教授）
（経　緯）
　2004年４月に国際的に権威のあるケンブリッジ（英国）のInternational Biographical CentreからAward「International Scientist of the Year 2004」を受賞した。
　これは、International Biographical Centreが編纂している「2000 Outstanding Scientists of the ２０th Century」「2000 Outstanding Scientists of the ２１st Century」並びに関係する他のbiographies登録者の中から、International Biographical Centreの評価選考委員会が選考し授与するものである。
　これは山口教授の所属する研究室（代謝調節学研究室）で発見、命名された蛋白質（レギュカルチン並びにRGPR-p１１７）の研究及び数多くの原著論文を国際誌に発表した実績が評価されたものである。
　また、人名録「Great Minds of the 21st Century」（2004　Edition）にも登載された。
　これは、American Biographical Institute, Inc.（Raleigh, USA）が編纂しているもので、当協会の選考委員会が国際的に優れた業績をあげている文化、芸術及び科学の分野から1000名を選定し、それぞれの略歴、業績や人生観などを掲載しているものである。
さらに、当協会のResearch Board of Advisorsのメンバーにも選ばれている。

「The International Biographical Centre Lifetime Achievement Award」を受賞

（受賞者）
　山口正義（大学院生活健康科学研究科教授）
（経　緯）
　国際的に権威ある英国ケンブリッジのInternational Biographical Centreから「The International Biographical Centre Lifetime Achievement Award」を受賞（2004年５月）した。これは、当センターが編纂している多数のWho's Who出版物に登載された文化、芸術及び科学の分野におけるbiographicメンバーの中から、当センターの評価選考委員会が選考し、千人に１人の割合で授与されるもので、当センターが関係する最高の賞である。これまでの400報を超える英文原著科学論文を国際誌に掲載、新規蛋白質や遺伝子の発見などの研究実績及び複数の国際特許登録などの社会貢献が評価された。
　この受賞に加えて、International Biographical Centreが選考している「International Order of Merits」（国際有功賞）も授与された（2004年５月）。
　これらのことにより、International Biographical Centre (IBC)のDeputy Director General (DDG)に任命された（2004年６月）。この立場は、IBC協会名を使用して国際会議等を開催する権限、当センターのbiography候補者の指名権などが与えられた。また、個人名にDDG称号を使用できる名誉が授けられた。
　以上の受賞については、当センターから国際メデイア等に公表、紹介された。

平成１６年度 「とやま賞（学術研究部門）」を受賞

（受賞者）
　五十里　彰（薬学部助手）
（目　的）
　学術研究、発明発見、芸術文化、スポーツの分野において、顕著な業績を挙げ、かつ、将来の活躍が期待される人に対して、賞状、奨励金を贈呈して、その活動を奨励することを本旨としている。
（過去の「とやま賞」受賞者には、ノーベル賞受賞の田中耕一氏など著名な方々が受賞している）

第５７回中日文化賞を受賞

（受賞者）
　鈴木康夫（薬学部教授）
（経　緯）
　受賞の対象となった研究は、ウイルスの受容機構、宿主域、宿主間伝播、変異・進化、抗ウイルス薬開発の基盤構築など、ウイルス感染におけるさまざまな主要な局面を、糖鎖ウイルス学的視点から明らかにした「インフルエンザウイルスの研究と創薬への応用」についてである。
　鈴木教授はインフルエンザウイルスが動物への感染の足場とする細胞表面の糖鎖の詳しい分子構造を初めて解析し、ウイルスが野生のトリからブタ、ヒトへと感染相手を替えていくメカニズムを明らかにした。これらの成果を生かしてウイルスの細胞侵入を防ぐ新物質を開発し、新しい抗インフルエンザ薬の開発の基礎を築いた。
　一連の研究はウイルス学と糖鎖生物学を融合した新しい学問領域としても高い評価を受けている。
（5月29日　中日新聞記事より抜粋）

平成１６年度東海総合通信局「電波の日･情報通信月間」表彰

（受賞者）
　静岡県立大学（伊勢村護附属図書館長が出席）
（経　緯）
　表彰の対象者は、電波の利用や情報通信の発展の功労者である。
　静岡県立大学は、研究開発用ギガビットネットワークを利用した研究開発プロジェクトに参画し、関係機関に対して、同ネットワークの利用支援を行うとともに、遠隔地分散安否情報システムの開発を行うなど、情報発信の普及促進に貢献したことが評価されたものである。

研究助成採択

平成１５年度　厚生労働省科学研究費補助金（化学物質リスク研究事業）

主任研究者　国立医薬品食品衛生研究所センター長　井上　達
研究課題：内分泌かく乱化学物質の生体影響に関する研究
　　－特に低用量効果・複合効果・作用機構について－
分担研究員　薬学部薬剤学教室　加藤善久
分担研究課題：甲状腺ホルモンかく乱物質に対する感受性の動物種差の解明

平成１６年度　浄化槽に関する調査研究助成（財団法人日本環境整備教育センター）

研究題目：腸球菌を新たな指標とした小型合併処理浄化槽での糞便汚染評価手法の提案
環境科学研究所　環境工学研究室　教授　岩堀恵祐、助手　宮田直幸、他１名

平成１６年度　財団法人食生活研究会　研究助成金

研究題目：カプサイシン受容体ＶＲ１発現細胞を用いた体熱産生亢進成分のスクリーニング
食品栄養科学部　食品化学研究室　助教授　渡辺達夫

外部資金受入状況

年度別受入状況　（単位：件、千円）

年　度	奨学寄附金		受託研究		共同研究		合　計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
平成12年度	16	118,100					16	118,100
平成13年度	74	122,410	21	79,107	4	5,719	99	207,236
平成14年度	82	88,389	25	64,532	10	86,700	117	239,621
平成15年度	143	96,364	21	52,055	7	65,200	171	213,619
合　計	315	425,263	67	195,694	21	157,619	403	778,576

平成15年度受入状況　（単位：件、千円）

区　分	奨学寄附金		受託研究		共同研究		合　計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
薬学部	94	50,240	7	13,450	5	19,400	106	83,090
食品栄養科学部	29	27,224	5	19,516	2	45,800	36	92,540
国際関係学部			2	4,070			2	4,070
経営情報学部	1	3,000	2	5,500			3	8,500
看護学部	3	2,000					3	2,000
環境科学研究所	16	13,900	5	9,519			21	23,419
合　計	143	96,364	21	52,055	7	65,200	171	213,619

※研究科については、各学部に併せて計上

科学研究費補助金　採択状況

年度別 採択件数

年度	新規課題		継続課題	合計
	応募	採択		
11	150	31	32	63
12	162	27	35	62
13	162	23	30	53
14	177	35	29	64
15	169	31	43	74
16	140	21	48	69

平成16年度 部局別 採択件数

部局	新規課題		継続課題	合計
	応募	採択		
薬学部	63	9	13	22
食品栄養科学部	21	3	7	10
国際関係学部	10	2	6	8
経営情報学部	7	1	5	6
看護学部	13	3	7	10
生活健康科学研究科	8	1	1	2
環境科学研究所	18	2	9	11
合　計	140	21	48	69

※国際関係学部には、国際関係学研究科を含む。

平成16年度 研究種目別 採択件数

研究種目	新規課題		継続課題	合計
	応募	採択		
基盤研究(S)	0	0	0	0
基盤研究(A)	3	0	0	0
基盤研究(B)	15	1	5	6
基盤研究(C)	60	11	27	38
萌芽研究	25	2	1	3
若手研究(A)	0	0	0	0
若手研究(B)	25	6	15	21
特定領域研究	12	1	0	1
特別推進研究	0	0	0	0
合　計	140	21	48	69

平成16年度に新規採択された研究課題及び研究代表者

基盤研究(B)

武田厚司	薬学部　助教授	生体微量金属の作用に着目した脳機能解析と脳疾患の予防

基盤研究(C)

今井康之	薬学部　教授	経口投与できる抗体医薬をめざした鼻咽頭リンパ組織を利用したIgA抗体の製造
菅谷純子	薬学部　助教授	細胞周期による薬物代謝酵素レベルの変動に関る核内受容体とそのコファクターの解明
鈴木　隆	薬学部　助教授	新型インフルエンザA型ウイルスの出現と感染伝播に関与するNA遺伝子の機能解析
阿部郁朗	薬学部　講師	植物二次代謝産物の分子多様性を創出するⅢ型ポリケタイド合成酵素の構造機能解析
伊勢村　護	食品栄養科学部　教授	レクチンの癌細胞アポトーシス誘導活性と癌特異的反応への応用の研究
貝沼やす子	食品栄養科学部　教授	咀嚼・嚥下困難者に適応できる米飯からの粥飯調整法の検討
守田昭仁	食品栄養科学部　助手	神経系を介して作用する温熱野菜の機能成分の探索とその機能解析
川瀬光義	経営情報学部　教授	基地所在自治体活性化事業の経済効果に関する研究
小寺栄子	看護学部　教授	変革期における看護職ミドルのキャリア開発に関する研究
六鹿茂夫	国際関係学研究科　教授	東欧・バルカンの民族問題と欧州安全保障体制に関する研究
伊吹裕子	環境科学研究所　助手	大気汚染物質と紫外線の複合影響に関する研究

萌芽研究

前田利男	薬学部　助教授	新規インスリン抵抗性自然発症マウスのインスリン抵抗性発現機構に関する研究
湖中真哉	国際関係学部　助手	東アフリカ・マー語系社会における廃物利用のヴァーチャル・ミュージアム構築

若手研究(B)

三宅正紀	薬学部　講師	プロテオミクスによるレジオネラ感染制御因子の網羅的解析
吉成浩一	薬学部　講師	新規な肥満・糖尿病制御要因：外来異物による脂肪組織Ah受容体活性化機構の研究
西村ユミ	看護学部　助教授	看護実践の為され方としての実践知に関する研究
小坂美智代	看護学部　助手	心療内科における看護実践能力とその獲得プロセスに関する研究
伊藤創平	生活健康科学研究科　助手	脊椎動物と古細菌に共通して存在するADP依存性キナーゼファミリーの構造・機能解析
谷　幸則	環境科学研究所　助手	マンガン酸化真菌と微量有害元素の相互作用の解明

特定領域研究

武田厚司	薬学部　助教授	生体必須微量金属の動態を利用した新規脳腫瘍画像診断薬剤の開発

継続課題の研究代表者

基盤研究(B)

奥　直人（薬学部 教授）、野口博司（薬学部 教授）、横越英彦（食品栄養科学部 教授）、菱田雅晴（国際関係学部 教授）、
木村忠直（看護学部 教授）

基盤研究(C)

佐藤雅之（薬学部 教授）、豊岡利正（薬学部 教授）、三輪匡男（薬学部 教授）、山田静雄（薬学部 教授）、
福島　健（薬学部 助教授）、加藤善久（薬学部 講師）、根本清光（薬学部 講師）、田邊由幸（薬学部 助手）、
木苗直秀（食品栄養科学部 教授）、中山　勉（食品栄養科学部 教授）、熊澤茂則（食品栄養科学部 助教授）、
合田敏尚（食品栄養科学部 助教授）、吹野洋子（食品栄養科学部 助教授）、渡辺達夫（食品栄養科学部 助教授）、
小久保康之（国際関係学部 教授）、吉村紀子（国際関係学部 教授）、剣持久木（国際関係学部 助教授）、
水野かほる（国際関係学部 助教授）、小出義夫（経営情報学部 教授）、小林みどり（経営情報学部 教授）、
渡部和雄（経営情報学部 教授）、末松俊明（経営情報学部 助教授）、松田正巳（看護学部 教授）、
岩堀恵祐（環境科学研究所 教授）、五島廉輔（環境科学研究所 教授）、相馬光之（環境科学研究所 教授）、
大橋典男（環境科学研究所 助教授）

萌芽研究

中島登美子（看護学部 教授）

若手研究(B)

加藤　大（薬学部 講師）、黄倉　崇（薬学部 助手）、古田　巧（薬学部 助手）、松森奈津子（国際関係学部 講師）、
鈴木竜太（経営情報学部 講師）、熊坂隆行（看護学部 助手）、斉本美津子（看護学部 助手）、佐藤智子（看護学部 助手）、
永田文子（看護学部 助手）、太田敏郎（生活健康科学研究科 助手）、牧野正和（環境科学研究所 助教授）、
大浦　健（環境科学研究所 助手）、杉山千歳（環境科学研究所 助手）、内藤博敬（環境科学研究所 助手）、
宮田直幸（環境科学研究所 助手）

※所属・職・氏名（五十音）順に掲載

はじめまして! コーディネーターの鈴木です。

静岡県立大学 産学官連携推進コーディネーター　鈴木 次郎

昨年１２月から本学の産学官連携推進コーディネーターをつとめております鈴木次郎です。

産学官連携推進コーディネーターと言っても何をする人か分かる方は少ないと思います。今年１月に初めての全国大学コーディネータ会議が開かれたことでも分かるように、日本では新しく生まれた職種です。本大学でも昨年６月からコーディネーターがおかれるようになりました。

バブルがはじけてから日本の産業は、国際競争力を急速に弱め、長期に亘る景気低迷を余儀なくさせられています。産業の再生に産業界は当然として、政府も国民も必死になって取り組んでいますが、なかなか妙手を見出せずにいます。日本の多くの産業が、国際競争力を確保するためにその生産拠点を発展途上国に移動させています。いわゆる産業の空洞化です。このままでは国内産業は衰退し、失業による社会不安までも憂慮されます。現在、日本は世界で最も高い生活レベルにあると言ってよいでしょう。このレベルを維持するには、新しくて付加価値の高い産業を創り出さなくてはなりません。

この難問題を解決する手段として大学が持つ研究成果や知識、研究能力が注目されています。お手本はアメリカにありました。バイオテクノロジーではカリフォルニア大学、エレクトロニクスではスタンフォード大学が中心となり、数多くのベンチャー企業が出現すると共に大学と民間企業の連携による新しい産業が生まれています。政府は１９９８年から２００２年にかけ、たて続けに大学や大学教官に科せられていた規制を緩和し、大学が持つ知識や技術を民間に移転し易くする、或いは大学発ベンチャーを促進する法律を成立させました。一方大学と産業界を繋ぐために文部科学省と経済産業省に産学連携担当部署を設置し、諸施策の促進を図っています。また、国立大学の独立法人化もその目的の一つに産学連携の推進があると理解されています。これらの政策を受けて多くの大学は産学官連携コーディネータを設置し、大学の研究成果を産業に活かす活動を始めています。産学官連携推進コーディネータの役割は今後実績を積み上げることによって、具体的になってくると思いますが概要はご理解頂けたと思います。

県立大学は従来から多くの企業と連携し成果を挙げてきましたが、今後はこれまで関係の薄かった中小企業との連携を深めていくことになります。

昨年度は３５件の技術相談に対応しましたが、大半が中小企業でした。その中の幾つかは技術移転や共同研究に結びつき始めています。中小企業経営者の新規事業に取り組む熱意は並々ならぬものがあります。しかし技術面が伴わないように見受けられます。県立大学は企業に技術の移転や指導・研究ばかりでなく、優秀な技術者を輩出する機関として非常に期待されていることが、企業の方々から強く伝わって来ます。既に、卒業生を是非紹介してもらえないかという相談をいくつか頂いています。

ここで、私の自己紹介を簡単にしておきます。生まれは１９４０年で静岡県菊川の出身です。昨年まで㈱興人という会社に勤めていました。興人に入社したきっかけは、１９７２年、当時静岡薬科大学薬品製造化学教室の

関屋実教授の下で、開発したアデニンの一段合成法を興人で企業化することなったためです。かっこよく言えばヘッドハンティングされたのです。当時、アデニンは世界の幾つかの会社で生産されていましたが、現在では価格競争力の関係で興人だけになっています。配属されたのは新規事業部門でしたが、今でも年間１０億円程度の利益を上げる事業に育て上げることが出来ました。また、研究開発部門の責任者も長く務めていましたので、広く浅く色々な技術について知識を蓄えることができましたし、技術者教育についても苦労してきました。特許については、法律のことは詳しくありませんが、実戦的にそれなりの経験を積んできました。休日は三島市の市民農園で無農薬・有機肥料による野菜栽培と１５～２０ｋｍのロングウオーキングで過ごしています。また、長年の調査癖から抜けられず、インターネットを駆使していろいろなことを調べて楽しんでいます。

産学連携を推進する観点から先生方にお願いしたいことを次に述べます。それは研究成果の工業所有権化です。先生方は、多くの場合研究成果を論文の形で発表されています。論文で公表されると工業所有権（特許）という権利が確立できません。企業は、研究成果を商品に仕立て上げるために皆さんが想像する以上の多くの人材と研究開発費を投入しなくてはなりません。企業では商品化研究の場合、最低でも５人位のグループを作り、活動します。年間１人当たり１,５００万円位の研究費と試作原料代、加えて試作設備の新・改造費が掛かりますので、人材の投入と年間２～３億円以上の投資になり、それが数年に亘ることが普通です。また、市場開発には技術開発以上の人材、費用、期間が掛かります。それでも成功するとはかぎりません。論文で公表された研究成果は誰でも利用出来ますので、折角苦労して開発しても、直ぐに後発会社が現れる危険性があります。特に力のある会社ほど２番手戦略を取るケースが多く、１番手の企業が開発費を回収する前に力まかせに市場を奪取する場合が多々あります。このように、企業にとって新製品や新事業の開発は極めてハイリスクであることが、理解されたと思います。大学の研究成果を企業に移転する場合、工業所有権は必要不可欠です。工業所有権が確立していないアイテムに企業は取り組まないと明言してもよいでしょう。論文で公表することによる社会貢献を否定するわけではありませんが、企業によって商品化されたり、サービスに変えられたりして、人々に安全で快適な生活を提供することがより具体的な社会貢献ではないでしょうか。実はこのことが、日本の産業再生に役立つことになると思います。この場をお借りして、先生方に研究成果の工業所有権化を是非推進していただくことを強くお願い致します。

企業に関すること、特許のことなど何でも結構ですので管理棟２階企画スタッフ横のコーディネーター室を気軽におたずね下さい。先生方の来訪をお待ちしております。

産学連携とは

我が国が目指す科学技術創造立国を実現するためにも、大学は学術研究を通じて将来の社会経済の活力を支え得る独創的基礎研究、先端的な新技術開発を積極的に推進し、新たな産業の創出に貢献することが強く望まれております。

社会が大学に寄せる期待や要請を、大学はその使命の一つとしてとらえ、大学の主体性を確保しつつ、社会との活発な交流を行うことは、研究の活性化や独創的な学術研究の萌芽・展開が期待でき、大学の発展に貢献するものと考えられます。

「産学連携」には様々な形態がありますが、主に「企業から大学への委託研究」「企業と大学の人的交流を含めた共同研究」「教員等の研究成果より生じた特許等を企業に提供する」などが挙げられ、大学の研究成果をより一層産業界に貢献させるための協力体制のことをいいます。

教員の人事

就　任（４月１日付け）

三輪　匡男　　薬学部教授
榊　　正子　　国際関係学部教授
勝矢　光昭　　経営情報学部教授
渡部　和雄　　経営情報学部教授
寺尾　良保　　環境科学研究所教授
川瀬　光義　　経営情報学部教授

採　用（４月１日付け）

浅井　章良　　創薬探索センター教授
松森奈津子　　国際関係学部講師
樋口まち子　　看護学部教授
八木　彌生　　看護学部教授
池田　和恵　　看護学部助手

（５月１日付け）

山崎　佳子　　看護学部助手

（６月１日付け）

澤田　潤一　　薬学部助教授
大石　真也　　薬学部講師

（７月１日付け）

清水　基宏　　薬学部助手
桑原　和代　　看護学部助手

昇　任（４月１日付け）

山田　静雄　　薬学部教授
宮城島惇夫　　薬学部助教授
園田　明人　　国際関係学部教授
寺尾　　康　　国際関係学部教授
小谷　民菜　　国際関係学部助教授
大楠　栄三　　国際関係学部助教授

（５月１日付け）

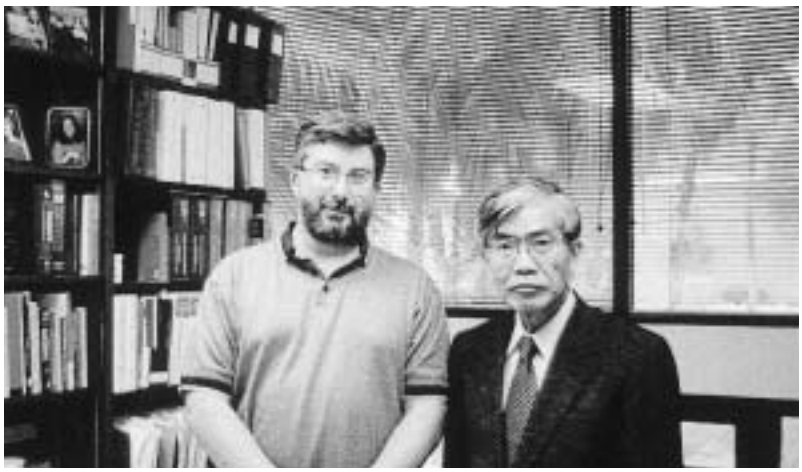
熊澤　茂則　　食品栄養科学部助教授
佐塚　泰之　　薬学部講師

退　職（３月３１日付け）

木村　良平　　薬学部教授
横田　正実　　薬学部教授
野澤　靖夫　　薬学部助教授
佐野　満昭　　薬学部助教授
伊藤　正樹　　薬学部助教授
鈴木　浩史　　食品栄養科学部助手
金井　壽男　　国際関係学部教授
北大路信郷　　経営情報学部教授
國崎稚加子　　経営情報学部助教授
鈴木　千智　　看護学部助手
揚張　美保　　看護学部助手
小宮　浩美　　看護学部助手

アリゾナ大学を訪問

薬学研究科臨床薬剤学教室の中野眞汎教授は、平成１５年１１月５日から１２月４日まで提携大学のアリゾナ大学にVisiting Professorとして滞在し、臨床薬学関係講義、病院での臨床実習、病院の治験体制、臨床試験倫理委員会を視察し、薬学部の薬経済学授業の中で日本の医薬品関係医療制度について講義をしました。



（アリゾナ大学 Armstrong 助教授室にて）

（アリゾナ健康科学センターにて）

はばたき寄金からのお知らせ

Ⅰ　平成１５年度はばたき寄金事業実績・収支結果報告

1　事業結果

（1）奨学金の授与

モスクワ国立国際関係大学短期交換留学生（派遣学生２人、受入学生１人）に奨学金を授与した。

（2）文芸コンクール・スピーチコンテストの実施

第７回文芸コンクール（７月～１０月）及び第６回学生スピーチコンテスト（11月１日）を実施した。

（3）創造力啓発コンテスト(学長企画イベント)の実施

本学の学生を対象として発明やアイデアを募集し、８件の提案があり、特別アイデア賞２件、アイデア賞１件を授与した。

（4）はばたき賞の授与

各学部における成績優良卒業生８名及び言語・文化の違いやハンディを乗り越え優れた学業成績をあげた学生２名に「はばたき賞」を授与した。受賞者総数１０人

＊上記の事業内容の詳細は、静岡県立大学はばたき寄金のホームページをご覧下さい。

（5）おおとり会賞

今年度は該当者なし

2　収支結果

○収入　　５，０２８，３９７円

内訳　前年度繰越金　　４，１４１，３５７円

寄附金　　８８７，０００円（教職員１９件　その他５件）

雑収入　　４０円（預貯金利息）

○支出　　９６５，７５７円

内訳　報奨等　　７９９，０００円

事業費助成　　９７，９０９円

雑費（賞状筆耕料等）　６８，８４８円

○差引残高　４，０６２，６４０円（平成１６年度へ繰り越し）

Ⅱ　平成１６年度事業実施状況（５月末まで）

・開学記念行事への助成

平成１６年４月２０日に開催した開学記念行事の経費に対し助成

５月末寄金残額　　３，９６２，６４０円

（担当　事務局経営課企画スタッフ　TEL５１０３）

大盛況！スプリングフェスティバル2004！

（第１８回剣祭委員長　佐久間　健一）

５月２９・３０日に剣祭実行委員会主催のスプリングフェスティバルが行われました。毎年恒例のスポーツフェスティバルは二日間に渡り学内外の参加者が爽やかな汗を流しました。両日とも天候に恵まれ、グラウンド・体育館では白熱した闘いが繰り広げられました。２９日の昼にはモニュメント下を舞台に体力自慢の選手が豪華賞品を目指し、競い合いました。また夕方には経営情報棟にてカレッジホールや各教室を使い様々なゲームが行われました。今年の参加者はスポーツフェスティバルが１６５チーム、そして夕方に経営情報棟で行われた「ミラクルボヤージュ」が約１６０名でした。今年特筆すべき点はチケットを無料にし、よりたくさんの人に来て頂いたことです。

このようにスプリングフェスティバルは、県立大学の春の一大イベントであり、活気にあふれ大盛況に終わりました。この活気を引き続き来年に期待して欲しいです。また秋にはいよいよ第１８回剣祭が行われます。１０月３０・３１日の２日間です。こちらもまた活気に満ち溢れた学園祭をみなさんと一緒に作り上げていけるように共に頑張っていきたいと思います。

多文化共生キャンプ

私たちの住む静岡県では近年ブラジル人を筆頭に在日外国人が増加しているにも関わらず、私たち日本人と彼らとの交流の場が足りないのではないかと気づきました。今後ますます国際化が進んでいくなかで、お互いに認め合い，協力して生活しようとすることの大切さに注目し、そういった意識をこれからの未来を担う子供たちに持ってもらいたいと考えました。そこで、共同生活を送ることで相互理解・多文化共生をすすめ、今後より良い関係を築きあげていく機会を提供すべく、この企画を立ち上げました。

また，私たち学生にとっても企画を通して、運営の手順・多文化交流を通して、国際理解教育を学ぶ機会にしたいと思っております。（国際関係学部　津富ゼミ）

（概　　要）

日　　時：　平成１６年8月9日（月）～１１日（水）　2泊3日

場　　所：　静岡市井川少年自然の家　静岡市井川３０５５－１

対 象 者：　静岡県内の小学４年生から５年生までの日本人と在日外国人

定　　員：　３６名（内訳･･･日本人１２名、在日外国人２４名）

スタッフ：　ボランティア２５名（学生ほか）

活動内容：　国際理解教育を取り込んだレクリエーション、ウォークラリー、多国籍夕飯作り　ほか

平成１６年度開学記念行事を開催

平成１６年度の開学記念行事が４月２０日（火）に開催された。

第１部では、初夏を思わせる陽気の中、学生を中心とした２５０名を超える参加者による運動会（学生が自発的に企画・運営を行った）を行い、綱引き・玉入れ・騎馬戦などで大いに盛り上がった。

第２部では「県大と地域貢献」というテーマについてパネルディスカッションが行われ、パネリストとして草薙ねっと代表、ボランティアサークル「防‘z」代表、学生ネットワーク代表、剣祭実行委員会委員長、地域経営研究センター、都市エリアプロジェクト代表が参加した。園部学生部長がコーディネーターを務め、県大が求められている地域貢献のあり方についてディスカッションが行われ、廣部学長をはじめとする１８０名を超える学生・教職員が聴講した。

第３部の教職員と学生の交流会である「はばたきの集い」では、実行委員の教職員とＡＶＬ委員会、ラグビー部などの学生が協力して準備・進行を行った。オープニングセレモニーでは、司会進行を新入生歓迎委員会が務めた。廣部学長の挨拶の後、コーラス部によるアカペラ・コーラスが披露され交流会の場を盛り上げ、４００名以上の教職員と学生が飲食を共にしながら語り合いお互いの交流を深め合った。

静薬創立88年記念式典・記念講演会および記念祝賀会の開催

今年、2004年は、静岡県立大学薬学部の前身で、且つ県下、唯一、最初の薬学校となった「静岡女子薬学校」が大正５年（1916年）に静岡市内に開設されて、末広がりの88年目に当たります。静岡女子薬学校は、私立静岡女子薬学専門学校、私立静岡薬学専門学校、県立静岡薬学専門学校を経て、昭和28年（1953年）に県立静岡薬科大学となり、昭和62年（1987年）には、本学薬学部へと発展的に移行して来ました。2004年は静岡薬科大学が開学した年から数えて丁度50年が経過した年でもあり、節目の年でもあります。

これを記念して、この2004年５月８日（土曜日）、本学大講堂で記念式典（10：00―11：00）、記念講演会（11：15―12：15）が、午後にはホテルセンチュリーで記念祝賀会（14：00―16：00）が開催されました。記念式典には、県知事をはじめ多くの来賓、卒業生、教職員、学部生、大学院生、合わせて700人余が出席しました。記念講演会では、元静岡薬科大学助教授（現　大阪薬科大学学長）矢内原千鶴子先生と静岡薬科大学卒業生（現　社会福祉法人聖隷福祉事業団理事長）山本敏博氏が、それぞれ「静岡薬科大学　― その輝く軌跡を今に、そして未来へ」、「薬剤師への期待」と題して講演されました。祝賀会でも、多くの来賓、卒業生、教職員、学生が集い、歓談しました。

平成16年度県立大学　年間行事予定・実績（5月以降抜粋）

時　期	行事内容	
	名　称	概　要
5月16日	ビジネス講座遠隔講義（学務スタッフ）	衛星を使用した遠隔講義の実施
5月29日～6月3日	日中健康シンポジウム（薬学部）	薬学部、食品栄養科学部等と中国浙江省学術機関によるシンポジウム
6月5日	研究室開放（環境科学研究所）	大学院受験希望者を中心に、各研究室が現在取り組んでいるテーマを紹介
6月5日	大学院生活健康科学研究科研究室公開（学務スタッフ）	大学院入学を希望する学生を対象とした研究室公開
6月6日	平成16年度『漢方と薬草の会』（薬学部）	県民対象「生薬学と漢方の基礎とお茶の効用」
6月9日	COEプログラム支援特別講演会（生活健康科学研究科）	最近の研究発表から講演会を開催
6月12日	静岡北高等学校環境体験学習（環境科学研究所）	静岡北高等学校理数科2年生（34名）を対象とした講義
6月19日	オープンレクチュア（経営情報学部）	学部授業科目の高校生向けの易しい入門・解説（公開）
7月9日	環境研究交流しずおか集会（環境科学研究所）	一般の方を対象に、ダイオキシン等の有害化学物質対策について講演会を開催
7月29、30日	ファーマカレッジ（薬学部）	県内高校生35人程度を対象に、実験や実習を通じて、科学に対する興味や理解を深めて貰う
7月30日	看護学部公開セミナー（看護学部）	地域の保健・医療・福祉の現場で働く方々対象のセミナー
7月31日を予定	親子環境教室（環境科学研究所）	一般の方を対象に、簡単な実験を通して身近な環境問題を捉え直す。親子で自由研究の課題を見つけるにも役立つかも・・・
8月1日	平成16年度『漢方と薬草の会』（薬学部）	県民対象「体の水回りを漢方で」
8月2～4日	県立大学オープンキャンパス（入試係）	本学入学希望者を対象に、各学部による説明、学生部職員による相談
8月20日	「県民の日」キャンパスツアー（企画スタッフ）	一般県民を対象に、大学構内の施設見学と体験学習
8月21日	環境科学研究所公開（学務スタッフ）	一般県民対象の研究所公開（公開） ※県民の日事業
8月第一週の予定	サマースクール（環境科学研究所）	学部大学生を対象に、最新鋭の実験機器を実際に取り扱い、測定原理から技術までの修得を目指す。修了者には、修了証を授与している
8月上旬	おもしろ実験特別講座（薬学部）	県内小学校理科担当教諭及び理科実験苦手教諭を対象に9つの実験講座において9つのテーマのおもしろい、不思議な、なるほど実験を実施する
県民の日前後の土曜日に開催を予定	研究所公開（環境科学研究所）	一般の方を対象に、研究所の研究内容の紹介や、環境問題に関する公開実験を行う
9月上旬	社会人聴講生（　後期科目）募集（学務スタッフ）	社会人を対象とした公開講座
9月（3回）	環境学習サポーター養成講座（学務スタッフ）	地域で環境活動に取り組む方の養成を目的とした講義
9月11、18、25日の3回を予定	しずおか県民カレッジ（環境科学研究所）	環境学習サポーター養成講座　(最終学習コース)
10月2、9、16、23日の4回を予定	公開講座（環境科学研究所）	県民の方を対象に、最新の「環境」に関する話題を4人の講師がわかりやすく解説。本年度のテーマは、「環境新時代21 文明・いのち・教育」
10月2日～11月20日の毎週土曜日	第18回静岡県立大学公開講座（学務スタッフ）	県民を対象としたテーマ別の講義
10月3日	平成16年度『漢方と薬草の会』（薬学部）	県民対象「老化に備える処方や食物」
10月16日	オープンセミナー（経営情報学部）	教員の自己紹介を兼ねた 自由テーマによる講演やセミナー（高校生向け、公開、定員制）
10月、11月、12月中旬に各1回	学部研究会（経営情報学部）	教員の研究発表
10月下旬（予定）	県立大学の“産学官民”連携を考える集い（仮称）（企画スタッフ）	産業界関係者等と学内教員の交流を深めるため、研究室公開・特別講演・交流会を学内で開催
10月30日～11月1日	剣祭（学生係）	県立大学の大学祭開催
11月10、17、24日の3回を予定	環境科学大学講座（仮称）（環境科学研究所）	本年度のテーマは、「21世紀の環境を考える」
3月上旬	静岡県立大学学術フォーラム2004（企画スタッフ）	学内教員の研究発表会
3月下旬	社会人聴講生（　前期・通年科目）募集（学務スタッフ）	社会人を対象とした公開講座

連 携 大 学 院

「旭化成ファーマ(株)ライフサイエンス総合研究所と連携大学院協定を締結」

本学は旭化成旭化成ファーマ(株)ライフサイエンス総合研究所との間に連携大学院協定を締結した。３月２４日に旭化成ファーマ(株)側から浅野敏雄ライフサイエンス総合研究所長と長谷　忠氏（４月１日から新所長）が来学し、長谷　忠氏と野口博司薬学研究科長の立会いの下に、廣部雅昭学長と浅野敏雄所長との間で協定書が調印された。これにより、同研究所が行う研究業務の活性化と本学大学院薬学研究科における研究･教育の一層の充実が図られるとともに、相互の研究交流が促進され、静岡県における科学技術の発展への寄与が期待される。

浅野所長に本学客員教授の称号を付与し、平成１６年度より、大学院生の指導並びに創薬の先端についての講義をお願いする予定である。

「聖隷浜松病院と連携大学院協定を締結」

大学院生の臨床教育と教職員の共同研究の推進を図るため、7月1日社会福祉法人聖隷福祉事業団総合病院聖隷浜松病院と連携大学院を実施する協定が締結された。

協定調印式は聖隷浜松病院（浜松市）で行われ、大学から廣部雅昭学長、相馬光之大学院生活健康科学研究科長、野澤龍嗣同研究科食品栄養科学専攻長、鈴木裕一同研究科教授が出席し、廣部学長と堺常雄院長により協定書の署名と交換が行われた後、廣部学長から、病院で大学院生の指導教育に当たる磯崎泰介腎臓内科部長に客員教授、古橋啓子栄養指導課長に臨床教授の称号付与状が手渡された。大学院生活健康科学研究科の大学院生2名が10月から半年間、両教授から指導教育を受ける予定である。この連携大学院の実施により、専門性の高い職業人、研究者の養成と、大学・病院間での技術情報交換や人的交流の促進が期待される。

大 学 間 協 定

日中健康科学シンポジウム、大学間協定調印報告

本学は５月３１日浙江省医学科学院と連携大学院構築を含む新規の大学間協定を締結しました。調印式は中国側では浙江省科学技術庁副長官、同衛生庁副長官、医学科学院名誉院長などが、本学からは事務局長が立ち会い、廣部学長と張幸院長との間で調印されました。調印式は本学からの一行１６名に中国側３１名が、静岡県の援助で西湖のほとりに建造された花家山荘の会議室に集うかたちで挙行されましたが、杭州のテレビなど取材もあり大変賑やかなものとなりました。 中国浙江省と静岡県は姉妹県という1997年学術文化交流協定を締結しておりました。また交流は古く1987年静岡薬科大学漢方研究施設と浙江省医学科学院が共同研究を行なっていたことにさかのぼります。その後静岡県立大学が開設され、1993年には第１回日中健康科学シンポジウムが催されて以来、隔年で静岡、杭州で交互にシンポジウムを行なって参りました。

浙江省医学科学院は、現在では肝炎ウイルスワクチンの中国における需要を一手に引き受けています。2002年に文科省COEプログラムとして健康長寿学術研究拠点が採択された中に、海外の研究拠点として上記科学院に研究拠点を設けることを謳っておりましたことが今回の協定に至る直接の動機と申せます。医学科学院の薬物研究所教授陳国神先生を県立大学客員教授に任命し大学院学生の交流、共同研究を発展させ、新知見を世界に発信しようというものです。 日中健康科学シンポジウムでは本学薬学部・食品栄養科学部・環境研究所の教員と浙江省医学科学院の研究者による健康科学に関わる２４の口頭発表と、１８のポスター発表が行われ盛んに質疑応答がなされました。シンポジウムの公用語は全て英語でありました。

浙江大学は中国全体でも質量ともに第３位にランクされる巨大な総合大学であります。本学とは抗州大学と呼ばれた時代に大学間協定が締結され、毎年中国語の語学研修で大学生が本学から派遣される一方、先方からは教員が１か月程度研修に訪れるという関係が続いていました。相互に互いの学部の紹介を行なった後、浙江大学薬学院と本学薬学部が学部間協定を締結致しました。協定は６月２日浙江大学医学院薬学院の建物１９階の大会議室で、辻学部長と曾蘇常務副院長の間で締結されました。これは学術交流・情報交換を旨とするもので、その実施細部については今後の協議によるもので、副院長並びに金副主任が来静し詳細の打ち合わせを行なう予定となっております。この調印式では４０人程度の大学院生が参加しており、臨床薬剤学の中野先生や生化学の鈴木先生に、論文で名前だけ知っていた先生が目の前にいると喜んで話をしたがって群がったのが大変印象的でした。こちらは調印式なども全て英語で、大学院生は勿論皆英語で話しかけておりました。 なお静岡県上海事務所には多大なご協力を戴きました。この場を借りて御礼申し上げます。

谷田風土記 82

谷田（やだ）地名の由来

県立大学のあるところは、静岡市谷田だが、なぜ『やだ』というかについての、説明はなかなかない。

一番古い文献は、『駿河新風土記』である。これは、谷田について、次のように書いてある。

『谷田、吉田に並びたる村なり。矢田山とある是なり。村名は、字のごとくなるところなり』

つまり宇度山で矢竹がしげっている処だから矢竹山とも矢田山と言ったのである。村名も徳川中期（享保）のころは、『矢田村』と公文書に書かれているが、後世、谷のあいだが開かれ、田をつくるようになったので、谷田という字も使われたと思われる。

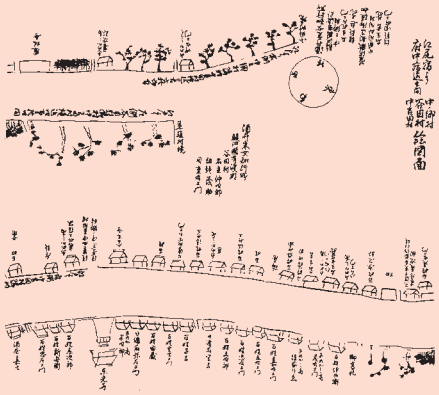
『領主は、旗下・酒井采女』

谷田村は、昭和三十四年四月一日、中吉田、中之郷、平沢とともに清水市に合併した。三十三年四月一日には、中吉田全区、平沢全区、中の郷と谷田の一部が清水市から分かれて、静岡市になったのである。だから、昭和三十年から三年間、県立大学は清水市だったことになる。このときのしこりは、現在も残っている。

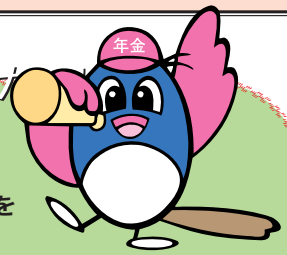
いま江戸時代の古絵図がある。これによれば、谷田村は酒井采女（越中守）の領地とある。石高一三四石八六である。

絵図左下の東光寺は、いまも現存する。その門前が東海道である。

（国際関係学部教授・高木　桂蔵）



ご存知ですか



国民年金の学生納付特例制度

学生の皆さんも20歳になれば国民年金に加入し、1ヶ月13,300円の保険料を納めることが法律で義務付けられています。

しかし、収入が無いなどの理由で保険料を納めることが困難な場合には、在学期間中の保険料を社会人になってから納めることのできる『学生納付特例制度』があります。

平成15年度は県内で約3万6千人の学生の方が利用しています

手続きもせず、そのままにしておくと…！

在学中の事故や病気で障害が残ったときも、障害基礎年金が受給できません。
将来、老齢基礎年金が受給できなくなる場合があります。

【申 請 先】住民登録をしている市区町村の国民年金担当窓口へ
【問合せ先】お住まいの市区町村の国民年金担当窓口または社会保険事務所

各社会保険事務所の連絡先

三島社会保険事務所（055）973−1166	沼津社会保険事務所（055）921−2201
富士社会保険事務所（0545）61−1900	清水社会保険事務所（0543）53−2231
静岡社会保険事務局（054）284−4311	島田社会保険事務局（0547）36−2215
静岡社会保険事務局掛川事務所（0537）21−5520	浜松東社会保険事務所（053）421−0565
浜松西社会保険事務所（053）456−8511	

国民年金については　http://www.sia.go.jp/　でもご覧になれます

学内ニュース「はばたき」への寄稿を大歓迎！

教職員・大学院生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル活動報告、ボランティア活動などの寄稿をお寄せください。大歓迎します。
事務局経営課・企画スタッフ（管理棟２階）あてにお願いします。
E−mail:kijo2@gm.u-shizuoka-ken.ac.jp

企画・編集：静岡県立大学広報委員会（事務局　ＴＥＬ０５４－２６４－５１０３）
静岡県立大学ホームページアドレス：http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています